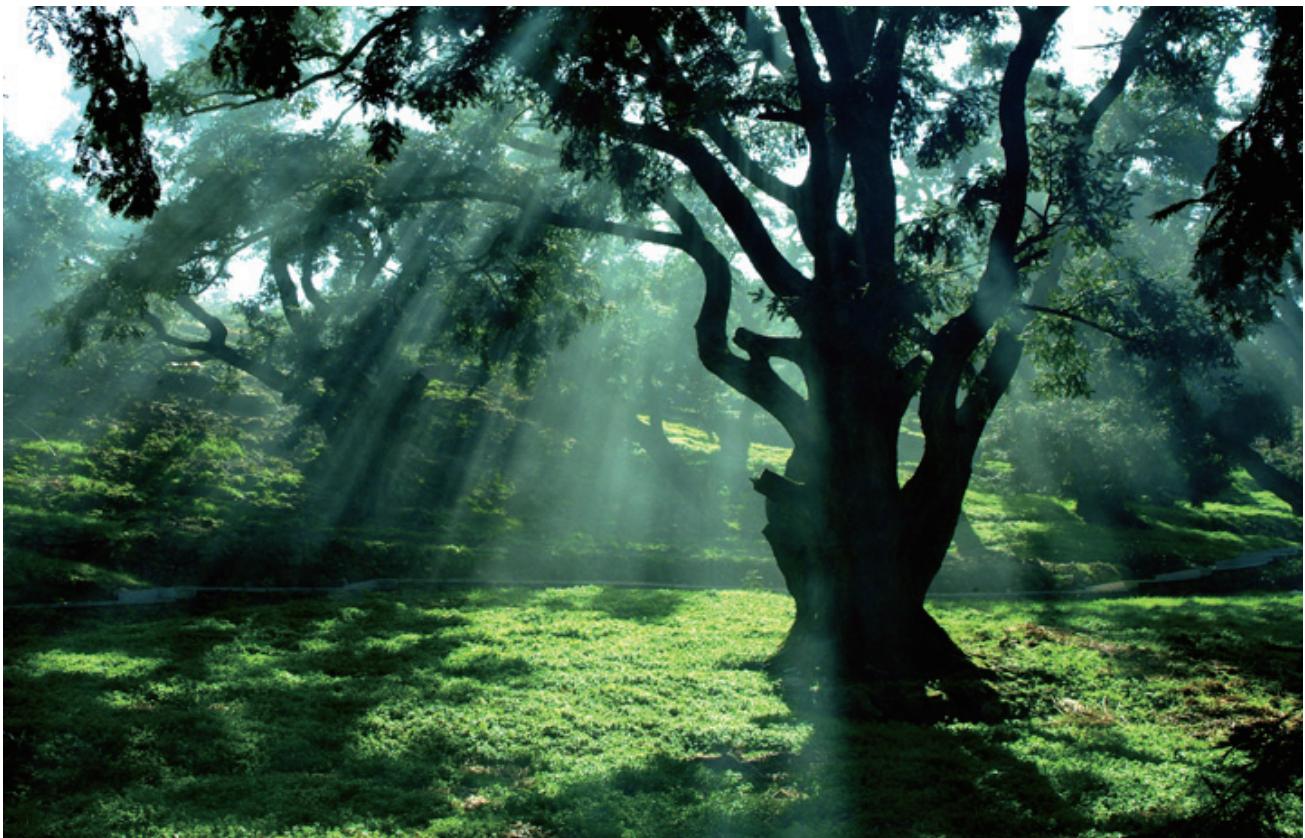


静岡県日中友好協議会ニュース

No. 113

2018. 12



世界農業文化遺産

「生きた標本」 紹興会稽山の古代榧林

浙江省紹興市にある「会稽山の古代榧林」は、2013年に「中国重要農業文化遺産」に認定され、国際連合食糧農業機関（FAO）より、世界農業文化遺産として登録されました。

榧の木の材質が重硬で弾力があり、耐朽性・保存性が高く、日本では碁盤、将棋盤、連珠盤の用途となります。会稽山の古代榧林は、会稽山の山脈に植生し、約400km²の面積にわたって約10万本の榧の木が植えられ、その中には樹齢1000年を超える木が数千本あります。この榧林は、古代の良種育成や接ぎ木技術を現在へ残す「生きた標本」と言われ、良種保存や土壤侵食防止等の重要な機能を果たし、油、木材、装飾、環境保護等様々な用途で使われています。また、山の急斜面を利用して、養殖池や榧林の下にお茶や野菜等の作物を作り、独自の複合的な生産システムを形成しています。

～促進機構第27回全体会議、静岡で開催～

静岡県と浙江省が共同で運営する静岡県・浙江省経済交流促進機構は、11月29日、静岡市内のホテルにおいて、本年は高屹浙江省人民政府副秘書長（同機構浙江省委員会副主席代表）ら19人を迎えて、促進機構第27回全体会議を開催しました。1993年に同機構が設立されて25年が経過し、双方の関係を強化する新たな一步を踏み出しました。

全体会議では、事業報告と事業計画が報告され、全会一致で承認されました。2018年の事業としては、静岡県側から技術士・生産経営管理専門家を派遣して、浙江省においての技術管理ビジネスフォーラムの開催、静岡県においてのビジネスフォーラム開催の協力、浙江省中長期調査員の受け入れ、また投資促進、進出後のサポート等を行い、併せて健康医薬・環境・農業・水産・学校の交流などの多分野のわたる交流と協力が行われました。



« 2019年 事業計画 »

1. 機構第28回会議の開催
2. 静岡県・浙江省経済交流シンポジウム・フォーラム及びビジネスマッチング事業の開催
3. 浙江省政府中長期調査員の招聘
4. 浙江省の各開発区への投資促進・進出後サポート及び静岡県への企業誘致促進
5. 業種別・分野別交流の促進
6. 浙江省投資ガイド2019年版発行

～静岡県・浙江省健康産業ビジネスフォーラム開催～



11月28日には、静岡市内のホテルにおいて『静岡県・浙江省健康産業ビジネスフォーラム』（主催：促進機構）を開催しました。

これまで培ってきた静岡県と浙江省との協力関係をベースに、「健康産業」をテーマに、医薬・医療器械、生態農業（有機農産品）、食品加工（健康食品、機能食品）の分野において、ビジネスのチャンスを創出する機会としてビジネスフォーラムを開き、浙江省から行政・団体関係者、企業経営者約50名が来静し、静岡県側からも約50名が出席しました。

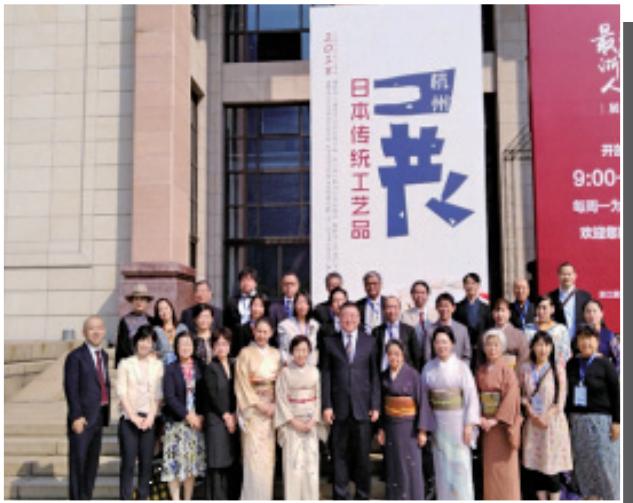
セミナーでは、浙江側から杭州医薬小鎮の紹介、杭州市桐廬医薬機械産業の現状と合作の前途、企業

プレゼンが行われ、静岡側からは静岡県の健康長寿関連事業（ファルマバレー・AOI・フーズサイエンス）の現状と協力の前途について基調講演が行われました。続いて、グループセッションでは、食品加工と健康医療の2グループに分かれて、和やかな雰囲気の中で交流を行い、両県省の企業同士の直接の交流の場を通じて、相互理解を深め、情報交換が行われました。

交流点描



今年下半期、静岡県と浙江省との間でいろいろな分野で交流の往来がありました。協議会が関連した交流を点描します。



☆日本伝統工芸品展覧会を開催（10月）☆

10月3日から6日まで、杭州市の浙江展覧館で「日本伝統工芸品展覧会」が開催されました。静岡県から4名の工芸家が、また全国から京都・福井・神奈川・石川等の工芸家ら35名が、焼き物・漆器・竹細工・陶芸・染物・寄木細工・和紙等を出展し、日本の伝統工芸品を浙江省民に紹介した他、工芸家同士の交流を促進しました。

☆浙江省茶文化交流調査団が来静（9月）☆

9月16日から19日まで、浙江省茶文化等交流調査団一行が静岡県を訪問しました。一行は世界緑茶協会や静岡県観光協会・静岡県書写書道振興会等と、茶文化や伝統工芸を中心とした交流について意見交換をした他、駿府匠宿やお茶ミュージアムを視察し、今後の交流についての調査を行いました。



☆環境保護分野で相互交流（9月～10月）☆

- ・訪中) 静岡県環境資源協会は職員を1名派遣し、調査研究を展開し、環境保護市場の情況と企業のニーズを理解し、また静岡県は環境保護研修生1名を派遣し、浙江省環境観測センターで研修しました。
- ・訪日) 浙江省環境保護産業協会では、職員2名を派遣し、環境関連企業を訪問し、企業とのマッチング交流の可能性を調査しました。

改革開放40年『今』、『昔』 人口問題

一人っ子政策を推進、不均衡を生む

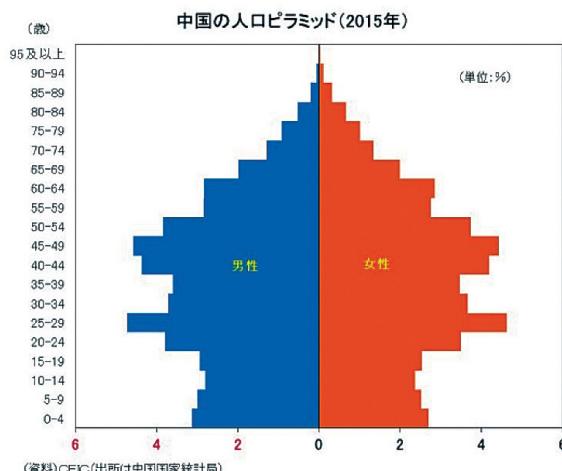
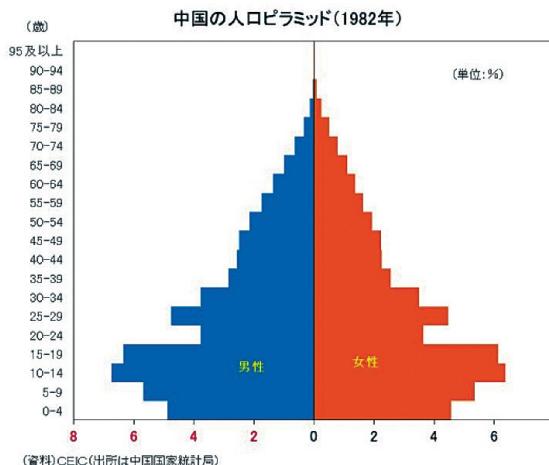
新中国が成立した1949年、中国の総人口は5.4億人でしたが、生活水準の向上と医療技術の発達により、改革開放が始まった1978年には9.6億人に激増し、経済社会の発展にとって大きな圧力となりました。このため、政府は計画生育政策、「一人っ子政策」を実施しました。

その後、人口構造の不均衡という問題が表面化し、2013年には夫婦の一方が一人っ子の場合は二人出産してよいことになり、2015年には一組の夫婦が二人出産できるよう全面的に政策の変更を行いました。これらの政策を通じ、人口構造のバランスを調整しつつ、2017年の人口は13.9億人に達しました。この間、女性の平均初婚年齢は21.4歳から25.7歳に、平均初出産年齢は23.4歳から26.8歳に上昇し、人々の生育観も変化し、出産する子どもを減らし、資質の高い子どもに育てるという「少生優生」という考え方方が主流となりました。

人口流動、制限から緩和

改革開放が始まった頃、戸籍制度等の制限もあり、中国の流動人口は非常に少なく、1982年の流動人口の全体に占める割合は0.7%でした。改革開放後は、政策の重心が経済建設、工業化、都市化にシフトし、農村に縛られていた労働力が都市部に大量移動し、2010年には流動人口は2.21億人に達し、その多くは長江デルタ、珠江デルタ、京津冀地域（北京・天津・河北）に集中しました。2014年には、原則、都市戸籍と農村戸籍が統一され、流動人口が都市に定住できるような政策が整えられ始め、全ての人が平等に発展する機会を持てるような社会を建設するという方向性が打ち出されました。

1978年、中国の都市化率は17.9%だったのに対し、2017年には58.5%に達し、2010年から2017年にかけては特に中西部の都市化が加速し、住民の生活の質も改善していきました。多くの都市が農村からの移住の制限を緩和し、居住証制度が全面的に実施され、これら流動人口も、常住人口として社会保障制度を受けられるようになりました。



中国最前線：今日のキーワード

ゼロから深化中の高速道路

全長20・4キロの滬嘉高速道路（上海市内～嘉定）が開通した1988年10月、中国に高速道路がなかった歴史に終止符が打されました。

京港澳高速道路、南北一気通貫

2017年末現在で、全国の高速道路の総延長は136,000キロになりました。南北をつなぐ京港澳高速道路は北京市を起点に、河北省、河南省、湖北省、湖南省、広東省を経由し、香港・マカオに至る全長2,283キロ、主要幹線道路網の一部となっています。

重点物流道路では、京港澳高速道路の貨物輸送量が全国で最も多く、このほか貨物輸送が活発なエリアは、京津冀、長江デルタ、珠江デルタの3大経済圏で顕著となっています。エリアごとの高速道路密度では、上位から上海市、天津市、北京市、江蘇省、福建省、広東省、浙江省、河南省、山東省、河北省の順。密度首位の上海市では、1万平方キロ当たり1310キロが敷設されている状況となりました。

専用機器の取り付け不要のスマホ決済へ

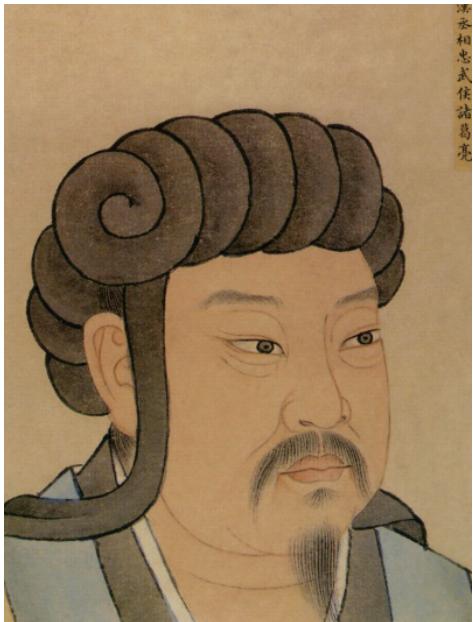


中国ではETCの普及が限定的であるのに対して、次世代ETCとされるITCの導入が既に始まっています。ITCとはスマホ決済と車のナンバー認識を利用するものであり、事前にアリペイ、WeChatペイなどのスマホ決済と自分の車のナンバーをアプリ上で紐づけておいて、料金所にはカメラが設置され、車のナンバーを読み取り、自動的にスマホ決済から料金を徴収するというものです。ETCと同じ感覚で、通過するだけで料金が支払えるということから、車の中に機器を取り付ける必要はないというのが最大の利点となっています。



スーパー高速道路を新規建設中

現在建設中の中国で初めてとなる「スーパー高速道路」（杭州市から寧波市までの161キロ。最高時速は時速120キロに設定される）は、近い将来の自動運転車の走行を前提として、路面には、電気自動車が走行しながら充電できる設備を設置、さらに位置ビーコンも備え、精密な自動運転を可能にするインフラ整備が含まれています。



【諸葛孔明 画】



【浙江省蘭溪市にある諸葛八卦村】

諸葛孔明は中国後漢末期から三国時代、群雄割拠する時代に、蜀漢の丞相として、劉備に「三顧の礼」で迎えられ、赤壁の戦いで魏の曹操を破り、全国に名を轟かせ、天才軍師の活躍が「三国志演義」に記載されています。

諸葛八卦村

浙江省金華市蘭溪市の西へ18キロほどのところに諸葛鎮があり、鎮内に諸葛孔明の末裔一族が多く住む諸葛八卦村があります。

現在約4,000人が住み、その住民の約80%、5人に4人は「諸葛」姓と言われています。



鐘池（陰陽魚太極図）

この村が作られたのは、1340年頃で第27代宗主の諸葛大獅の時代です。諸葛大獅は、建築の専門知識があり、村の構造を綿密に設計した上で、諸葛一族の村づくりを始めたそうです。

村の敷地内は、易（古代占法の一つ）の八卦（はっけ）の形に設計され、鐘池（陰陽魚太極図の形）を中心にして八本の小道が放射状に外側へ向かって延び、内八卦を形成しています。外側は8つの山に囲まれ、村を外界から隔離し、これが外八卦と言われています。村自体も小高い山の上にあるため、これまでの数々の戦乱から逃れ、守られてきましたと言われています。何百年もの歳月を経ていますが、形を全く変えず、現在に至っています。

更に、村には現在でも200軒以上を超える明・清時代の建物がほぼ完璧な状態で残っていること等から、1996年11月に国務院の全国重点文物保护单位に指定されるとともに、国の「AAAA級観光地」にも指定されています。

今時の中国の学生

就職戦線異状なし？

寧波大学外国語学院外籍教師
(静岡県日中友好協議会 交流推進員)

横井香織



急に気温が下がり、雨の日が続く寧波の初冬。いよいよ就職活動本番です。2019年6月に卒業予定の学生は、卒業後の進路（就職か進学か）を決め、その準備に入っています。今回は、寧波大学の就職事情をお伝えしましょう。

寧波大学外国語学院日本語学科の4年生60名の内、就職希望者は毎年40名前後です。その就職希望の学生たちは、3年生後期には授業で「商務文書」などを学び、企業見学に出かけます。大学では、11月に外国語学院主催の企業招聘会（求人説明会）が、12月には全学対象の企業招聘会が開催されます。3月になると4年生は、卒業論文に取り組みながら、インターンシップで企業に体験入社する学生も出てきます。

では、どんな職種が学生たちに人気があるのか、直接聞いてみました。すると「公務員です。安定と高給が重要ですから。」「教師も人気があります。」と、返ってきました。もちろん日本語を使う仕事に就きたいという学生も、少なくありません。

ただ、日本語学科の先生方によれば、最近は少しずつ学生の希望や考え方方が変化しているようです。経済発展が目覚ましく景気のよい中国、とりわけ浙江省では、省政府の方針で、外資導入より地元の中企業の発展を優先してきました。現在は多くの優良な中小企業が、若い人材を必要としています。学生たちは、自分の能力を発揮できる会社、資格取得や海外経験などのチャンスがある会社を求め、そこで実績や経験を積んだのち、さらに給与など待遇のよい企業へ転職しようと考えるようになりました。そういうえば、寧波で知り合った30代の中国人は、みな2、3回、転職を経験していましたし、次を考えている人もいました。安定志向から、経歴を高めて次のチャンスをつかむ、という新たな働き方を選ぶ人々が、中国の都市部には増えているのです。

いずれにしても、せっかく4年間日本語や日本の文化を学んだのですから、ぜひ日本語を生かして仕事をしてほしいと思っています。



【企業見学（寧波宝新）】



【活気にあふれる就職説明会】

プロフィール：横井香織さん

学歴：静岡大学人文学部卒業、兵庫教育大学大学院博士課程修了、博士（学術）

職歴：静岡市内の公立中学校、県立高等学校に30数年間勤務

2016年に中国へ渡り、中国海洋大学を経て、現在、寧波大学外国語学院外籍教師

歴史の街道

-- 源遠流長 --

浜名湖館山寺、蘇州寒山寺とのゆかり（かんざんじ）

浜名湖館山寺

浜名湖湖畔の館山寺温泉に古刹・館山寺があります。810年に空海によって創建されたと伝えられる、この館山寺は810年頃遣唐使の一員であった高僧が蘇州の寒山寺に似ているとして名づけられたと言われています。



蘇州寒山寺

江蘇省蘇州市の楓橋鎮に寒山寺があります。この寒山寺は、南北朝時代の天藍年間（6世紀初）に創建されました。その後、火災に遭ったり、太平天国の乱があったりして、何度か消失し、最後に再建されたのは清末の1906年です。

詩人・張繼が寒山寺を詠んだとされる七言絶句「楓橋夜泊」は広く知られています。

エピソード

館山寺は、寒山寺と友好提携を結び、館山寺にはその記念の鐘「明治の鐘」が鎮座しています。

寒山寺の鐘は古い時期に日本へ持ち去られたと言われたこともあり、1905年、時の首相・伊藤博文が両寺院に同じ梵鐘を寄贈しました。その後、館山寺の梵鐘は戦争の混乱で焼失しましたが、寒山寺で保管していましたことがわかり、2006年に両寺院が友好提携を結んだことを契機に、地元観光協会が仲介役となって梵鐘の再鋲造が実現しました。

